

寺尾琢磨譯

『マルサス人口論(第六版)』改譯版

南 亮 三 郎

87

寺尾琢磨・伊藤秀一兩氏が岩波書店經濟學古典叢書のうちに『マルサス人口論(第六版)』を譯出刊行せられたのは昭和四五年のことであつた。この頃までにマルサスの初版はすでに幾人もの人々によつて譯出せられて讀書界を賑はして居り、最終第六版の形態に於けるものも亦、佐久間原氏及び神永文三氏によつてそれぞれ姿を現はしてゐた。しかしこの佐久間譯(大正十四年)及び神永譯(昭和二年)はエヅリマンス・ライブラリー版を臺本としたもので、マルサスの正版としては聊か物足りない憾みがあつた。寺尾・伊藤兩氏の共譯本は右のエヅリマン

書評

ス・ライブラリー版の原形たる Ward, Lock 版に據つたもので、マルサスの附したる卷末の長い附録は勿論のこと、詳細なる索引をも併せ譯出したる實に忠實、且つ良心的なる譯書であつた。學界の久しい待望は上下二卷にわたる莊重なるこの譯書によつて一舉に滿されたわけであつた。

私はその後、昭和初十年間の日本人口論界を綜觀する機會を有したが、そのとき寺尾・伊藤共譯本について次の如き記述をなした。即ち、「上卷の卷頭には監修者小泉信三氏の雄篇『マルサス人口論解題』を收めて讀者を便し、譯文亦頗る嚴密で長年月にわたる苦心彫磨の末に成つたことを思はしむるに充分である。臺本はマルサス生存中の最終版たる一八二六年の第六版であるし、謂ゆる正版の決定的全譯はこれで申し分なく立派に成し遂げられたわけである。たゞ定價が上下二卷を通じて十三圓三十錢に及ぶといふ高さで、前掲神永氏の譯本が圓本中の一冊になつてゐるのに比べて、一般の讀書子の手には容易に届き難いであらう。いつの日にかもつと手頃なる版本に組み直されて出るやうな機會もあらばと思ふこと切である」と(拙著『人

87

口論發展史』三省堂刊、二〇八一—二〇九頁。

今にして思へばこの記述には少しく思ひ違ひがあつた。「臺本はマルサス生存中の最終版たる一八二六年の第六版」ではなくて、實はそれを複製したるベタニーの Ward, Look 版であつたのだ。そのため後段に指摘するやうな譯文上の不幸な一破綻を來たす結果となつた。だが、それはともあれ、右の記述に待望せられた「機會」はつひに來たのである。標記の改譯版がそれで、上下二卷の歴大なる舊譯書は全面的な改訂の後、組みかへられて一巻に纏まり、資材不足勝ちな長期戦下の今であるに拘はらず猶ほ原著の品位を保ち傳へるに足る程度の上き装幀のもとに讀書界に現はれたのである（菊判八四七頁・定價九圓・昭和十六年七月慶應出版社刊）。譯者寺尾氏はこの改譯版出現に至るまでの経過と苦心の一端とを序文に記してゐられるが、嘗ての共譯者伊藤氏はこの間に故人となり、改譯の業は寺尾氏一人の負ふところとなつた。「斯くて私は獨力これに當る決心を固め、昨年夏以來忙中閑を偷んで筆を執り、一箇年を費して全部に互つて殆んど全く稿を改めることが出來た」といふことである（改譯の辭）。——世界政治の深刻なる動搖とともに人口學者マルサスの影日毎薄れゆきつゝあるの今、牢固不拔の信念をもつて學的良好の命ずるまゝ孜々として改譯の筆を進められ

て行つた寺尾氏の努力と熱意とに、私は深い敬意を表せざるを得ない。

譯文が極めて嚴密で充分に信頼するに足ることは前述した通りである。しかも譯者の豐富なるヴォキャブラリーと流麗典雅なる表現方法とは、原文の意を少しも害ねることなしに全く自在莊重の文章を構成し、一見して譯書たるの面影をさへ留めざるものたらしめてゐる。この手腕と苦心とは、いづれかの章節を原文と對照する者の、ひとしく認めざるを得ない所であらう。その青春時の熱情を盛つた潤達なる評論風の人口論初版がいはば達意奔放の大内・高野共譯本（昭和十年岩波文庫）に決定的日本版を見出し、その圓熟なる思想と豐富なる資料とを學術論文の形に展開した人口論正版——第六版はその最終形態——がこゝに莊重典雅なる寺尾氏改譯本に決定的日本版を見出さうとしてをることは、まことに望みても得がたきことであつた。悪罵、嘲笑、而して呪咀はマルサスの甘受せる歴史的運命であつたが、その論著が極東の一國に於てかくも完全なる形で今尚ほ眞摯なる讀書人の手に行きわたたりつゝある様をおもふとき、彼こそは地下にその幸福を感謝していゝわけである。

さて改譯版の内容であるが、私は今それを仔細に語るべく全部に互つて舊版と對照したわけではなく、また一々原文に照らし合せて検討したわけでもない。私には今その違もなければ意思も持つてゐない。たゞ舊版の場合に聊か氣付いてゐた過誤があつたので、それがどの程度に改訂せられたかを先づ知りたかと思つた。通讀して受けた感じでは、たしかに全部に互つて改訂の跡が見られる。けれども、どうしたことか私の氣付いてゐた舊版の過誤は多くそのまゝ改譯版に持ち越されてゐるのである。これは甚だ残念なことであつた。例へば、

(一) 舊版上卷五八頁六行目に「一種族に於ける増殖行爲は隣りの種類に對する侵略行爲」といふ一句があるが、新版(四二頁三行目)でもそのまゝになつてゐる。「隣の種類」は「隣の種族」でなければなるまい。

(二) 舊版上卷六六頁一二行目に「ア、フリ、カ、全土」とあるが、これは原文「all parts of America」であるから明かに「アメリカ全土」の誤記であつた。然るにこの明白なる誤記は新版に於ても氣付かれなかつたばかりでなく、丁寧にも、その誤つた假名を漢字に改めて今度は「亞、弗、利、加、全土」と書いてある(新版四七頁終りより二行目)。「メ」と「フ」との相違ならば大したことにもならないが、その誤つた「フ」が「弗」と書き改め

られるとなると、單なる誤植の言ひ譯とはならぬ。惜しいことをしたものである。

(三) 舊版上卷八九頁に「オタヒート島は一七六七及び六八の兩年には豚と家禽とに溢れてゐたが、而も其の數年前の一七六三年には是等の鳥獸の供給甚だ乏しく、殆ど何物を以てしても之を所有者より購ふ事は困難であつた。此の主たる原因は、船長クックに従へば、右期間に勃發した戰爭に在る」といふ一齣がある。新版ではそのまゝ六三頁に出でゐる。何氣なく讀み去ればそれまでのことであるが、しかしよく考へてみればこれほど了解するに困難な記述はない。といふのは、この譯文では「一七六七及び六八の兩年には豚と家禽とに溢れてゐた」が「その數年前の一七六三年には」非常に缺乏してゐた、そこからかういふ風に缺乏してゐた食料が數年後の「一七六七及び六八の兩年に」豊富になつた「主たる原因」はこの「期間に勃發した戰爭に在る」といふことになる。戰爭が食料を缺乏せしめたといふならば不思議はないが、こゝではその反對に増加せしめたとなつてゐるのだ。

念のためにマルサスの原典(一八二六年の本當の第六版)と對照してみると、矢張りこれは譯文の誤りで、「一七六三年」は「一七七三年」といふことになつてゐる(第一卷七七頁)。

それでこそ初めて、「一七六七及び六八の兩年」に「溢れて」
 るた食物は「一七七三年」には「甚だ乏しく」なつた、そして
 それは「この期間に勃發した戰爭」のためだ、といふ筋道にな
 る。しかし、譯文の嚴密を誇るこの譯書がなぜこの簡單な誤り
 を犯したのであらうか。しかも譯文には「而も其の數年前、一
 七六三年」といふ風にマルサスの原典には無い説明句がわざわ
 ざ「一七六三年」の年號に附してある。これは譯者自らもこの
 年號が非常に不條理と思つたので、少くとも前後の關係を讀者
 に示すつもりで附したものであらう。しかし、さうすればする
 ほど不條理は一層目立つて來る。これには何かの理由があるの
 だらうと思ひながら、私はこの譯書の臺本となつたものがマル
 サスの本當の原典ではなくて、後年に至つてベタニーの複製し
 た謂ゆる Ward, Lock 版であることを思ひ出し、それに當つて
 みた。すると果せる哉、この版では譯文の通り「一七六三年」
 となつてゐる（四三頁）。そしてそれは明かにベタニーの誤植な
 のである。いま吾々の譯者は不幸にもこの誤つた Ward, Lock
 版を臺本とし、その誤植の上に立つて、誰が見ても判るやうな
 前後の不條理を繕ふべく苦心せられたかに見える。かうしてみ
 ると、この譯書は『マルサス人口論第六版』と銘打つてあるけ
 れども、實際は第六版そのものでなくて後人の複製版に過ぎな

かつたことを、氣の毒に思はざるを得ない。

(四) また舊版一七〇頁四行目には、「黑人に眞に缺如する
 ものは、財産の不安定と、其の一般的隨伴者たる勤勉とであつ
 て」といふ句があり、これまたそのまま新版一一八頁六行目に
 反復されてゐる。これはマルサスの原典も Ward, Lock 版も共
 に "Security of property" で、「財産の安定」である。さ
 うでなければ「勤勉」がどうして「財産不安定」の「一般的隨
 伴者」たるかど了解し得ない。譯者の簡單な誤記でありながら、
 どうしてこれが「殆ど全部に互つての改稿」となつたこの新版
 で氣付かれなかつたかど不思議である。

(五) 舊版四二三頁八行目、新版二九三頁七行目の「現に佛
 蘭西に生存する小兒の相對數」は原文 "Proportionate num-
 ber" であつてこゝでは「相當數」といふ意味であらう。

(六) 舊版一三九頁四行目、新版九七頁九行目の「人口原則」
 は原文 "principle of increase" であるので、これは矢張り忠
 實に「増殖原理」と稱すべきであらう。なほ舊版一八二頁六行
 目・新版一二六頁七行目の「増殖力」も原文 "principle of
 increase" である。これも私の希望から言へば「増殖原理」で一
 貫して欲しかつた。いづれにせよ、これらの重要な用語が新
 版に於いても格別譯者の注意に上らず、依然無統一のまゝに放

置せられてゐるのは残念なことである。

三

以上は舊版の上巻で、新版では前半の部分である。まだ後の半分があるけれども、前半に比すれば比較的無瑕に出来てゐるやうに思はれる。たゞ最後に、この機會を利用して一つ指摘して置かねばならないことがある。それは譯者の罪では決してないが、マルサスの原典そのものに若干の統計上の誤記があるといふことである。

その著しいものは第二篇第十二章「流行病が出生・死亡・及び婚姻の登録簿に及ぼす影響」に於て引用してをるズニスミルヒの統計表である（譯書舊版上巻五六四頁、新版三九一頁）。この表に於ける譯者の責は「出生」の欄の十行目（一七三五年に至る四年間）を二九、六九二としてゐるが、これはマルサスの原表（第六版第一卷五〇〇頁、Ward, Lock 版二七七頁）では二二、六九二とあるので、それを誤記しただけである。ところが、この原表そのものが少々怪しいのである。いま手許にあるズニスミルヒの『神の秩序』（ベルリン一七七五年、増訂第四版、附録八三頁以下）——マルサス自身もこの版を利用して抜粋したものらしい——と對照して見ると、次の如き誤記があ

る。

「婚姻」の欄——下から五つ目の數字「九五、五八五」は「九五、五八四」の誤り。最後の「三四〇、八三八」は「三四九、八三八」の誤り。

「出生」の欄——上から六つ目の「二二、六〇三」は「二二、六〇二」の誤り。九つ目の「二九、五五四」は「二〇、五五九」の誤り。十六目の「二八、八九二」は「二八、三九二」の誤り。

「死亡」の欄——上から二つ目「一四、四七四」は「一四、五七四」の誤りである。

かくてすでにこの一表には、吾々の譯者の誤記をも數へると實に八つの數字の間違ひが含まれてゐるのである。そしてその間違ひだらけの一表がマルサスの原典だけではなく、Ward, Lock 版に、エヴリマンス・ライブラリー版に、——否、そればかりではなく幾つとも知れない各國翻譯版に、そしてズニスミルヒの祖國たるドイツ版に於てさへ！ 全く無造作に反復印行せられて萬國に傳はつてゐるのである。何といふ恐るべき過誤の堆積であるか。だが、さらばと云つて私は翻譯者を責めるつもりは少しもない。かういふ所まで確證しつくさねばならぬとしたら、翻譯者は實際やり切れないに決まつてゐる。けれども世界に與へた波紋の大きいだけに、マルサス原著の不備は

輕々に看過し得られるものでない。

筆は聊か横道に外れた。私はこゝで、寺尾氏改譯版の出現を慶び、それをひろく讀書界に紹介するとともに、心付きたる若干の瑕瑾を指摘して將來増版せらるゝ場合の参考に供し得れば宜しいのである。實際、翻譯の困難は、翻譯者のみが知るところであらう。殊にマルサスのこの書の如きは常人の到底容易に着手し得ない性質のものである。それをかくも異常の熱意を以て成し遂げ、反マルサスの聲のみ聞かれる今の日本で隱忍よくこれを改稿して正版の殆ど決定版に近きものを完成せられたことは敬服の至りである。

卷末に附載せる「解題」に於て譯者は、至當にもマルサスに對して世人の抱ける誤解を指摘して、「彼の欲したものは眞に強大なる大人口であつて、彼を目して人口の敵と見做すのは此の上もない謬りである(八四六頁)」と述べてゐる。然り、この點こそは、どのやうに強調せられてもマルサスの眞意を誤まるものではないであらう。時代は正に、いつこの國に於ても大人口を須要してゐる。だがこれは、譯者のいふ通り、「透徹せる人口理論に立脚する最も計畫的な人口政策なくしては望み得ない」ところである(八四六―八四七頁)。人口理論の想源に立ち還つて、虚心にマルサスを讀み取ることほど望ましいものはあ

るまい。敢へてこの改譯版を江湖にすゝめる所以である。

附言するが、近年改造文庫中に出た松本信夫氏譯『マルサス人口論』は前述のエヅリマンス・ライブラリー版を臺本としたものである。(昭和一六・九・二四)。

(註)ボナーはこれを一七六五年の第三版と判定してゐるが、今それを確め得る便宜がなす。J. Bonar, Theories of Population from Raleigh to Arthur Young, London 1931, p. 162 note 19. 及び ditto, Malthus and his Work, 2nd ed., London 1924, p. 414. 参照。

野間海造著

「日本の人口と經濟」

小田橋貞壽

日本における人口問題の論議は昨今頗に活潑の度を加へた觀